

第2章 持ちすぎる事 (Having Too Much)

著者: Ingrid Robeyns

1. 序論

現代の分配的正義理論は、正義の測定基準(metric)と分配ルール(distributive rule)を常に明確化する。測定基準は、正義の観点から分配が重要である財Xに関係する。最も影響力のある測定基準には、福祉、資源、基本財、ケイパビリティがある。分配ルールはXがどのように分配されるべきかを規定する。代表例は、優先原理、充足原理、結果の平等、機会の平等、ロールズの差異原理である。

本章は、私が**リミタリアニズム**と呼ぶ分配的正義の見解を明確化し擁護する。端的に言えば、リミタリアニズムは、人生において完全に繁栄するために必要とするよりも多くの資源を持つことは道徳的に許されないと主張する。リミタリアニズムは、富裕(riches)または富(wealth)を持つことを、人生において最大限に繁栄するために必要とするよりも多くの資源を持つ状態と見なし、そのような場合、道徳的に言って「持ちすぎている」と主張する。

リミタリアニズムは分配的正義の部分的説明に過ぎない。なぜなら、最大限に繁栄していない人々に対して分配的正義が何を要求するかについて不可知論的である方法で特定できるからである。例えば、リミタリアニズム的閾値以下における多くのバージョンの機会の平等のいずれかと組み合わせることができる。

本章で私が擁護するリミタリアニズムのバージョンは、富裕線以下で何が起こるかについて不可知論的ではない。しかし、セクションIIで指摘するように、リミタリアニズムには複数の異なるバージョンがあり、異なるバージョンは富裕線以下で道徳が何を要求するかについて異なる見解を持つかもしれない。

本章では、リミタリアニズムを**非理想理論**として擁護する。リミタリアニズムが理想理論として擁護できるかという問いは今後の研究に委ねる。非理想理論としてリミタリアニズムを分析するには、所得と富の所有の分配を現状のまま出発点とする必要がある——継承された富と特権の不在、すべての人の基本ニーズが満たされた世界、初期の財産取得の状態といった強く理想化された性質を持つ世界における正しい分配が何であるかを問うのではなく。

社会科学者と人文学の学者は、社会の最悪困窮層の立場について理論化し研究を行う長い伝統を持つ。正義論において、これは充足主義への広範な支持に特に顕著である。その支配的理解において、充足主義は、分配的正義は誰も特定の最小閾値——貧困閾値または最低限度の生活閾値のいずれか——以下に落ちないことを確保することに関心を持つべきだという見解である。

貧困と不利の研究が広大であることは驚くべきことではない。なぜなら、ほとんどの人々はこれらの状態が本質的に悪いという見解を持っているからである。

貧困と最悪困窮層の立場に関する相当な哲学文献を考えると、現代の正義論化がほとんど(あるいは全く)所得と富の分配の上限尾部に焦点を当てていないことは驚くべきことである。明らかに、一般的な不平等に関連する正義理論についての膨大な文献がある。政治哲学者たちは、分配の上限尾部を特に取り出す必要がないと仮定しているのかもしれない。それでも、政治哲学者が分配の上限尾部の規範的分析を行うことは有益だと私は考える。

一つには、これによって哲学者が社会における既存の議論により大きな影響を与えることが可能になるだろう。長い間、富裕層の権利、特権、義務に関連する規範的主張が公的議論で前進してきた。ほとんどの国には、経済危機の代償を貧困層や中産階級ではなく富裕層が支払うべきだと主張する政党

がある。近年、いくつかのヨーロッパの政党が最高所得層の最高限界税率の引き上げを提案している。同様に、米国のOccupy運動は「1パーセント」にはるかに重い税金を課すべきだと主張してきた。

興味深いことに、近年、複数の経済学者が所得と富の分布の頂点の分析を発展させてきた。最も有名だったのはThomas Pikettyの『21世紀の資本』であり、他の経済学者との以前の共同研究とともに、後の書籍の実証的基礎を形成するデータの一部を生み出した。これらの研究は、第二次世界大戦後の数十年間で不平等が減少したものの、1980年代以降、富の不平等が再び拡大していることを示している。

2. 本質的リミタリアニズム vs 非本質的リミタリアニズム

最も一般的な定式化において、リミタリアニズムは分配道德に関する主張であり、望ましい財の分配において特定の閾値以上に位置することは道德的に許されないことを含意する。

リミタリアニズムは様々な次元や領域で、また異なる理論的修正を伴って擁護される可能性がある。例えば、気候倫理文献で研究されてきた個人排出量割当のケースは、リミタリアニズム的制度の例である。

本質的リミタリアニズムは、富裕であることが本質的に悪いという見解である。いくつかの可能な理由がある：

1. **徳倫理学的理由:** 富裕であることは悪徳である(貪欲、傲慢など)
2. **宗教的理由:** 多くの宗教伝統は富の蓄積を非難する
3. **平等主義的理由:** 他者より多くを持つこと自体が本質的に悪い

対照的に、**非本質的リミタリアニズム**は、富裕であることが他の価値を損なうために問題であるという見解である。本章で私が擁護するのはこの非本質的バージョンである。

3. 民主主義的議論

リミタリアニズムの第一の議論は、**政治的平等**の保護に基づく。民主的政治システムにおいて、富裕層はその富によって不釣り合いな政治的影響力を行使できる。これは以下の方法で生じる：

3.1 富が政治的影響力を生む経路

1. **政治献金:** 富裕層は政党や政治家に多額の資金を提供できる
2. **ロビー活動:** 専門的ロビイストを雇用し、立法過程に影響を与える
3. **メディア所有:** メディア企業を所有または支配し、公的議論を形成する
4. **シンクタンク:** 研究機関に資金提供し、政策議論を方向づける
5. **訴訟能力:** 高額な法的訴訟を提起または対抗する能力

3.2 政治的平等への脅威

極端な富の集中は、民主主義の核心的価値である**平等な政治的影響力**を損なう。市民が平等な政治的影響力を持つべきだという理念は、「一人一票」の原則に体现されている。しかし、富裕層が財政的資源によって不釣り合いな影響力を行使できる場合、この平等は形式的なものに過ぎなくなる。

政治的平等を保護するためには、富への上限が必要である。この上限は、誰も政治システムにおいて不公正な優位を得るのに十分な富を持たないことを確保する。

3.3 異議への応答

異議1:「富裕層は専門知識を持ち、より良い政策判断ができる」

応答: 政治的影響力は認識的権威(epistemic authority)に基づくべきではない。民主主義は平等な市民の自己統治に関するものであり、専門家支配(epistocracy)ではない。

異議2:「表現の自由への侵害である」

応答: 富への上限は発言を禁止するものではなく、金銭的資源を通じた不公正な政治的優位を防ぐ。すべての市民は発言する自由を持つが、富によって声を増幅する能力には限界があるべきである。

4. 満たされない緊急ニーズからの議論

リミタリアニズムの第二の議論は、**緊急で満たされていないニーズ**の存在に基づく。世界には深刻な貧困、飢餓、予防可能な疾病で苦しむ人々が数億人存在する。同時に、一部の個人は生涯で使い切れないほどの富を蓄積している。

4.1 中心的主張

富裕層が持つ余剰富(surplus wealth)——完全な繁栄のために必要としない富——は、緊急ニーズを満たすために使われるべきである。これは以下の理由による:

1. **限界効用の低下:** 富裕層にとっての追加的富の価値は極めて低い
2. **緊急性:** 貧困層の基本的ニーズは緊急かつ重要である
3. **道徳的義務:** 最小限のコストで他者の重大な苦痛を防ぐ道徳的義務

4.2 Peter Singerの議論との関係

この議論はPeter Singer(1972)の有名な「池の子供」議論の修正版である。Singerは、私たちが重要なものを犠牲にすることなく悪いことを防げる場合、そうすべき道徳的義務があると論じた。

しかし、Singerの議論は**要求しすぎる(too demanding)**という批判を受けてきた。リミタリアニズムはより限定的な主張をする:完全な繁栄のために必要としない富のみを再分配すべきである。これは、人々に最低限度以上の生活を送ることを許しながら、極端な富の蓄積を制限する。

4.3 実装の問題

緊急ニーズの議論は以下の実践的問題を提起する:

1. **誰が決定するか:** 何が「緊急ニーズ」を構成するかを誰が決定するか?
2. **優先順位:** 複数の緊急ニーズがある場合、どのように優先順位をつけるか?
3. **効果性:** 資源が効果的に使われることをどのように確保するか?
4. **国際的義務:** 国境を超えた義務の範囲は?

これらは困難な問いだが、リミタリアニズムの原則的正当性を損なうものではない。

5. 富裕の説明 (Account of Riches)

リミタリアニズムを操作化するには、「富裕」または「富裕線」の明確な説明が必要である。この闡

値をどこに引くべきか?

5.1 富裕は絶対的か相対的か?

絶対的説明: 富裕線は、場所や時代に関係なく、人が完全に繁栄するために必要な資源の固定量である。

相対的説明: 富裕線は社会の平均富または他の相対的基準に依存する。

私は**絶対的説明**を擁護する。その理由:

1. **貧困との対称性:** 貧困線は一般的に絶対的に理解される(基本的ニーズの満足)。富裕線も同様に絶対的であるべきである。
2. **ケイパビリティ・アプローチ:** Amartya Senのケイパビリティ・アプローチは、人間の繁栄を機能とケイパビリティの観点から理解する。一定のケイパビリティ・セットが達成されれば、追加の資源は繁栄に寄与しない。
3. **実証的証拠:** 心理学研究は、特定の所得レベルを超えると、追加の金銭が主観的幸福度にほとんど寄与しないことを示している。

5.2 物質的資源の力 (PMR: Power of Material Resources)

富裕線を計算するために、私は「物質的資源の力(PMR)」という概念を提案する。これは以下を含む:

1. **総所得 (Y):** 世帯の年間総所得
2. **現物給付:** 金銭的価値に換算された所得または移転
3. **生涯年金 (A):** 世帯の富の生涯年金推定値
4. **合理的費用の控除:** 職業上の義務的費用
5. **税金の控除:** 所得に対して支払った税金
6. **個人的特性の調整:** 障害などの追加コスト
7. **世帯等価尺度 (ES):** 世帯規模と構成の調整

$$PMR = [(Y + \text{transfers} + A - \text{reasonable costs} - \text{taxes}) \times \text{personal characteristics adjustment}] / ES$$

5.3 富裕線

富裕線は、PMRが完全な繁栄のために必要なレベルを超える点である。このレベルは以下によって決定される:

1. **基本的ケイパビリティ:** 栄養、住居、医療、教育
2. **社会的統合:** 社会活動への参加能力
3. **自己実現:** 自分の価値ある目標を追求する能力
4. **セキュリティ:** 将来の不確実性への備え

私の暫定的推定では、先進国における富裕線は年間約**200,000-300,000ドル(世帯調整後)**である。この数字は議論の余地があり、さらなる実証研究が必要である。

重要なのは、この線以上の富は**余剰富(surplus wealth)**であり——完全な繁栄のために必要ではない富である。リミタリアニズムは、この余剰富が道徳的に正当化されないと主張する。

6. 道徳的教義か政治的教義か？

リミタリアニズムは道徳的教義か、それとも政治的教義か？この区別は以下の理由で重要である：

道徳的教義は、個人が私的領域でどのように行動すべきかを規定する。例えば、富裕な個人は自発的に富を寄付すべきという主張。

政治的教義は、社会制度がどのように設計されるべきかを規定する。例えば、富への上限を強制する税制政策。

私が擁護するリミタリアニズムは主に**政治的教義**である。その理由：

1. **制度的焦点**: 主な関心事は社会制度の設計である
2. **強制の必要性**: 自発的行動だけでは不十分——体系的制度変化が必要
3. **正義の要求**: 分配的正義は制度に関する問いである

しかし、リミタリアニズムには道徳的側面もある。富裕な個人は、リミタリアンの税制が実装されていない場合でも、余剰富を寄付する道徳的理由を持つ。

7. 異議への応答

7.1 不平等な機会からの異議

異議: 「人々が異なる出発点から始まる場合、彼らは異なる量の富を必要とする。したがって、単一の富裕線は不公正である。」

応答:

1. PMRの計算は個人的特性(障害など)を調整する
2. 富裕線は完全な繁栄のための閾値である——不平等な出発点を完全に補償するためのものではない
3. 不平等な機会の問題は、リミタリアニズムと組み合わせた他の正義原理(機会の平等など)によって対処されるべきである

7.2 インセンティブからの異議

異議: 「富への上限は、人々が懸命に働き、革新し、起業する動機を破壊する。これは経済的非効率をもたらす。」

応答:

1. **実証的疑問**: 非常に高い所得が本当に必要なインセンティブかは不明である
2. **内発的動機**: 多くの人々は金銭以外の理由(創造性、社会貢献、名声)で働く
3. **限定的影響**: 富裕線は非常に高く設定される——ほとんどの人々に影響しない
4. **代替的インセンティブ**: 社会は非金銭的インセンティブ(名誉、認識)を発展させることができる

5. **経済的利益**: 極端な不平等の削減は、社会的結束、政治的安定、経済成長に利益をもたらす可能性がある

さらに、ロールズの差異原理は、不平等が最悪困窮層の利益になる場合のみ許容されると規定する。これはすでに、無制限のインセンティブ支払いを拒否する。リミタリアニズムは、この論理を上限に拡張する。

8. 今後の研究課題

本章はリミタリアニズムの基礎的議論を提供したが、多くの問いが未解決のまま残っている:

1. **富裕線の精密化**: 実証研究を通じた富裕線のより正確な推定
 2. **実装メカニズム**: リミタリアンの税制の具体的設計
 3. **国際的次元**: 国境を超えたりミタリアニズムの適用
 4. **世代間正義**: 将来世代への含意
 5. **理想理論**: リミタリアニズムの理想理論バージョンの発展
 6. **他の財への拡張**: 権力、名声、生態的資源へのリミタリアニズムの適用
 7. **多元的閾値**: 異なる価値のための異なるリミタリアンの閾値
-

結論

本章では、リミタリアニズム——道徳的に許容される富への上限があるという見解——を明確化し擁護した。二つの主要な議論を提供した:

1. **民主主義的議論**: 極端な富の集中は政治的平等を損なう
2. **緊急ニーズの議論**: 余剰富は満たされない緊急ニーズのために使われるべきである

リミタリアニズムは、現代社会が直面する不平等の課題に対処するための重要な規範的ツールを提供する。それは、「十分に持つ」ことだけでなく、「持ちすぎない」ことも道徳的に重要であることを認識する。

この見解はさらなる精緻化と議論を必要とするが、富の上限の道徳的・政治的重要性に注意を向けるという重要な機能を果たす。極端な不平等の時代において、「持ちすぎる」との哲学的検討は、単なる学術的関心事ではなく、緊急の社会的必要性である。
